

2002年夏中国内モンゴル自治区オルドス市とアラシ ヤン盟調査報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000453

2002年夏 中国内モンゴル自治区 オルドス市とアラシャン盟調査報告

Report on the Oasis Project in Ordos and Alashaan, Inner Mongolia

Yang Haiying

楊 海 英

(静岡大学, jhyang@ipc.shizuoka.ac.jp)

目 次

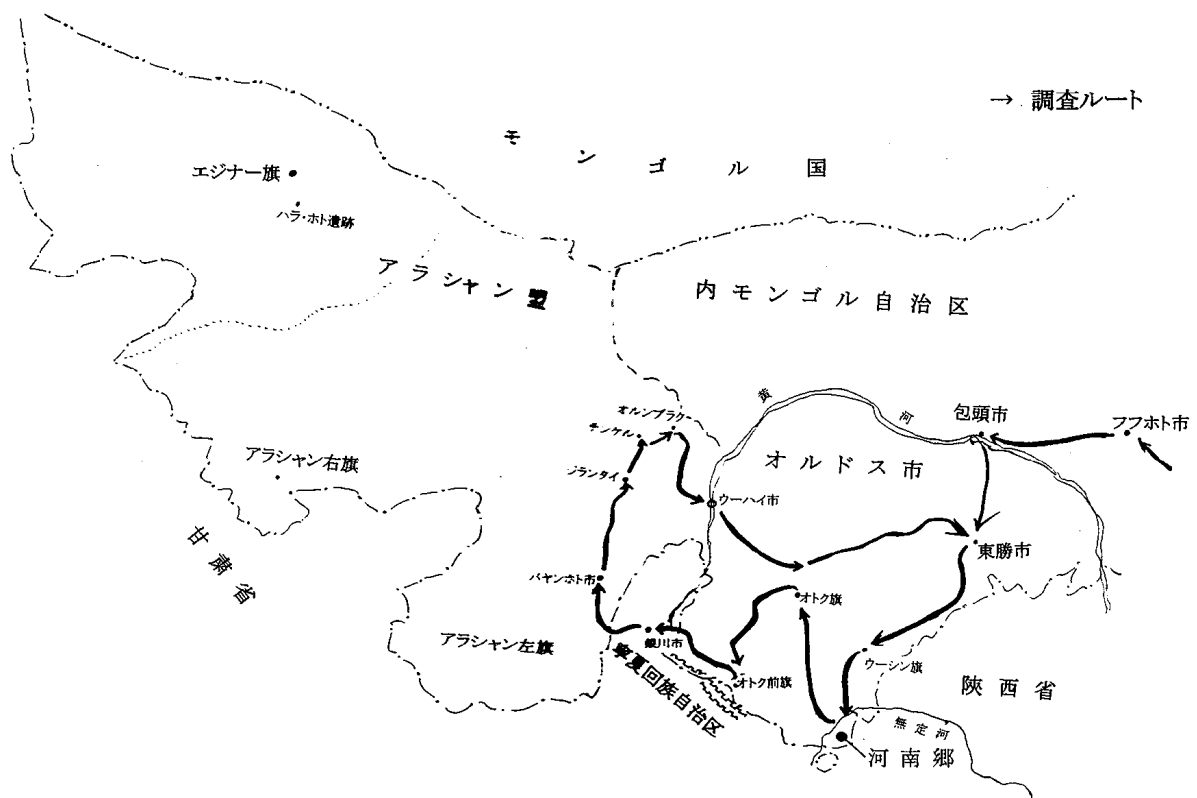
1. 話題は税金と商売
2. 生態旅遊という観光
3. 生態移民と冠した強制移住
4. 良い年の過ごし方
5. 小北京の断碑

2002年8月16日から9月14日にかけて、総合地球環境学研究所の「オアシスプロジェクト」(中尾正義教授リーダー)の一環として、内モンゴル自治区西部オルドス市(元伊克昭盟)とアラシャン(阿拉善)盟において、社会と政治状況に関する人類学的な実地調査を行った。調査者は北京から列車で内モンゴル自治区の首府フフホト市に入り、そこから自動車をチャーターしてオルドス市とアラシャン盟を走行した(調査ルート図参照)。オルドス市においては黄河の支流たる無定河流域における水利用、草原地帯における灌漑事情など、その実態と問題点を近現代史のなかでの大規模な人的移動との関連を中心に聞き取りを実施した。アラシャン盟では、主として近現代における民族自治運動の展開について資料収集を行った。

1：話題は税金と商売

2002年は雨が多く、内モンゴル自治区西部は例年になく緑に覆われている。老人たちの話では1964年以来のことだそうだ。中には1950年の共産党政権成立以降、はじめて草が良く成長した年だと表現する人もいる。たしかに至るところで目にする草原の状態は良く、家畜もまるまると太っていた。

まずオルドス市ウーシン旗西部にある牧業地域で調査を始めた。西部大開発



2002年夏調査ルート図

の政策の一環として、経済的に後れた地域を優遇するため、家畜税を徴収しない見通しだと地元ソム (somu, 村) の責任者たちが説明していた。当然その情報は牧民たちにも伝わっており、多額の税金に対する不満は今年は聞かれなかった。ここで参考のために、2000年夏に、ウーシン旗のある牧民が政府に納付していた税金一覧表を提示しておく。それには牧業税、屠宰税 (屠殺税)、特産税、農業税、農業附加税、車船使用税、地方教育附加税など多種多様な税金が含まれていた。税金のほかに、地元のソム (村) 政府には管理費、教育附加費、優撫費、民工建勤費、民兵訓練費、計画生育 (出産) 費などを納入しなければならなかった (資料1参照)。家族2人からなる所帯で、ヒツジ161頭を飼育し、数畝の飼料用畑をつくっていた場合、1069.83元にのぼる税金と雑費を払わなければならなかった。牧民たちは「昔、中華民国の国民党は税金が多かったのに対し共産党は会議が多かった。いまや共産党は税金も会議もどっちも多い」、と表現していた。昨年までの税金政策と比べれば、諸税免除という政策は魅力的である。税金免除というニュースもおそらく牧民たちの心情を快くしたのであろう。そのため、草原も一段と美しく見えているかもしれない。

また、今年の羊毛の値段は1キロ当たり約14元 (10,000円≒670元 2002年

农业牧业统计申报及税金计算一览表

（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）（十一）（十二）（十三）（十四）（十五）（十六）（十七）（十八）（十九）（二十）（二十一）（二十二）（二十三）（二十四）（二十五）（二十六）（二十七）（二十八）（二十九）（三十）（三十一）（三十二）（三十三）（三十四）（三十五）（三十六）（三十七）（三十八）（三十九）（四十）（四十一）（四十二）（四十三）（四十四）（四十五）（四十六）（四十七）（四十八）（四十九）（五十）（五十一）（五十二）（五十三）（五十四）（五十五）（五十六）（五十七）（五十八）（五十九）（六十）（六十一）（六十二）（六十三）（六十四）（六十五）（六十六）（六十七）（六十八）（六十九）（七十）（七十一）（七十二）（七十三）（七十四）（七十五）（七十六）（七十七）（七十八）（七十九）（八十）（八十一）（八十二）（八十三）（八十四）（八十五）（八十六）（八十七）（八十八）（八十九）（九十）（九十一）（九十二）（九十三）（九十四）（九十五）（九十六）（九十七）（九十八）（九十九）（一百）

七
卷

[illegible]

调查员签字:

8月現在)で、昨年までと違い等級別に売買されず、一律この値段であった。人々は羊毛値段の高騰をひそかに待っている。

オルドス地域に羊毛を求めてやってくるのは、内モンゴル自治区の西にある寧夏回族自治区の回族商人たちである。彼らは集団でトラックを運転して牧民の家をまわるが、牧民たちの家に入ろうとはしない。牧民たちから出されたお茶や食事も口にしない。直接井戸から水を汲み、屋外で石を使って簡易五徳を作り、自炊する。それはイスラム教徒である彼らが異教徒のモンゴル人の食べ物をタブー視しているからである。モンゴル人女性たちは回族のこのような行為を好意的に受け取る。中央アジアの遊牧民と同様に、モンゴルには接待文化があり、客が訪れたらお茶や食べ物を出してもてなすのが一般的である。もてなしは、女性たちにとって、決して楽な仕事ではない。接待をせずにすむから女性たちは喜んでいるが、回族商人たちは商売上手で、羊毛を安く買い取ろうとするため、手ごわい相手でもある。

もうひとつの調査地は、農業地域のオルドス市ウーシン旗西南部の河南郷である。河南とは黄河の支流無定河の南に位置していることからの名称である。無定河の上流の名は紅柳河で、いくつかの細い流れと合流してから無定河となる。モンゴル人はこの河をシャルウスン・ゴールすなわち「黄色い水の河」と呼ぶ。ここでは灌漑事情について地元のモンゴル人に聞いた。それによると、1978、1979年頃に掘った機井(写真1)と呼ぶ電気ポンプ式井戸はほとんど使えなくなったという。当時は2～3メートル掘れば水が出ていたが、灌漑農地の拡大により、現在では地下水位が下がり汲み上げられなくなったためである。いまや地下へ100メートルほど掘る深水井戸を造らない限り、灌漑できなくなっているとの証言を得た。深水井戸は個人の力でできるものではない。井戸をほるため、農民たちは数戸で連携したり、政府に低利子投資を懇願したりしている。

農業は漢人がやるもので、農業をはじめたら、モンゴル人はモンゴルらしさを失う、という見方は大勢のモンゴル人たちのあいだに存在する(楊 1990:35-37)。河南郷にはモンゴル人農民が約2,000人ほど居住しているが、彼らの子弟が通うモンゴル語小学校(写真2)は数年前に廃校になった。モンゴル人の子供たちは仕方なく漢語学校に通うようになっていく。若いモンゴル人を中心に、母語であるモンゴル語を忘れていく人が増えている。母語を忘れ、その上農業に従事していることから、牧畜地域のモンゴル人たちから「漢化した人々」だと見られている。

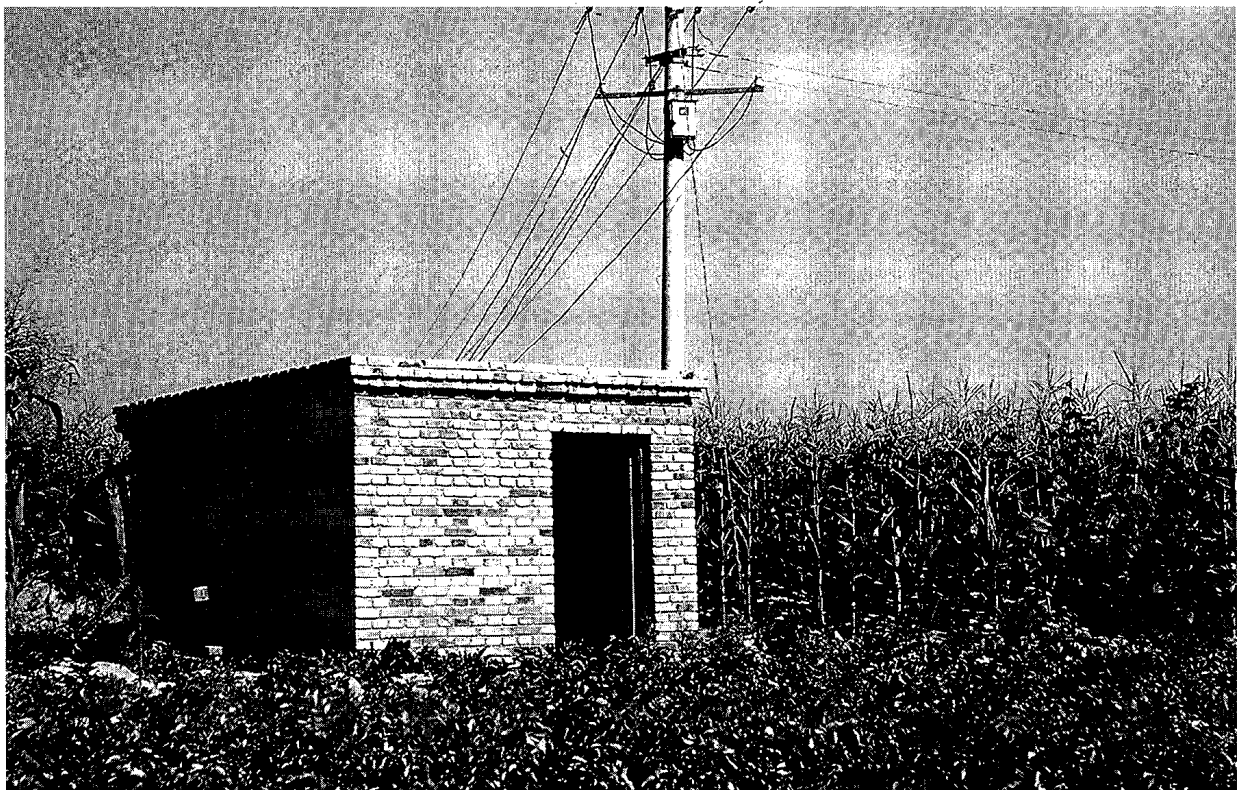


写真1 機井と呼ばれる電気ポンプ式井戸。
家畜の飼料となるトウモロコシ畑に灌漑用水を提供する。



写真2 いまや廃校となったオルドス市ウーシン旗河南郷のモンゴル族小学校。
1991年冬の国旗掲揚式。

2：生態旅遊という観光

環境問題への関心が高まるにつれて(写真3)、生態という言葉が中国でも最近よく使われるようになった。ただ、現代漢語の生態という言葉は、日本語のそれとは多少意味が異なり、人間の手が加えられていない手つかずの自然を指すニュアンスが強いようである。こうしたなか、「生態旅遊」という現象が内モンゴルとその周辺でめだってきている。

生態旅遊とは、名所や遺跡を訪れるのではなく、自然環境のすぐれた場所へ行くことを意味する。隣接の陝西省や寧夏回族自治区から、内モンゴル自治区西部へ生態旅遊に訪れる観光客が年々増加している。観光客らは生態保護の名目で囲まれた草原を目指す。このような草原を「生態開発区」と呼ぶ。

「生態開発区」とされる観光地(写真4,5,6)は、内モンゴル自治区西部に位置するオルドス市のオトク旗とオトク前旗に数カ所点在する。いわゆる生態開発区とよばれる小さな草原は、農耕化された地域に囲まれている。オルドスの草原が開墾され、大面積の農耕地が出現したのは、1950年以降の漢族農民の進出の結果である。漢人農民の手が届かなかった地域にモンゴル人が居住し、細々と牧畜を営んできた。漢人農民の居住地に比べれば、植生も破壊されず緑がたくさん残る。このようなところが生態開発区となり、旅遊という観光資源にもなったのである。

モンゴル人牧民たちが生活の場としている草原は漢人の目に生態の良い場所として映ったため、開発の対象とされている。政府や大手企業は開発と保護を名目に、草原への進出を進めている。現在、草原を生態開発区として開発しているのはいずれも化学工業集団やカシミヤ工場集団の経営者たちである。

このような生態旅遊は、世界的に見られるエコ・ツーリズムの本質と通ずる一面がある。橋本は『観光人類学の戦略』のなかで、エコ・ツーリズムの登場についてつぎのように分析している。世界の先進国は自らの手で自然を破壊しながら、自然の大切さを説く。そして自分たちの生活スタイルをなんら変えずに、途上国の自然保護を語る。それには地球の環境危機の議論を先延ばししようというねらいすら見え隠れ、自然保護の名目で新しい開発を企む可能性もある。エコ・ツーリズムは自然保護の美辞を弄したビジネスであると指摘している(橋本 1999:266-289)。オルドス市の現状はまさにその中国版であるといっても過言ではなかろう。

オトク旗とオトク前旗は中国の生態保護重点地域に指定されている。いわば、環境破壊のもっともすすんだ地域と認定されたのである。破壊された環境をも



写真3 自然環境保護を呼びかける看板。

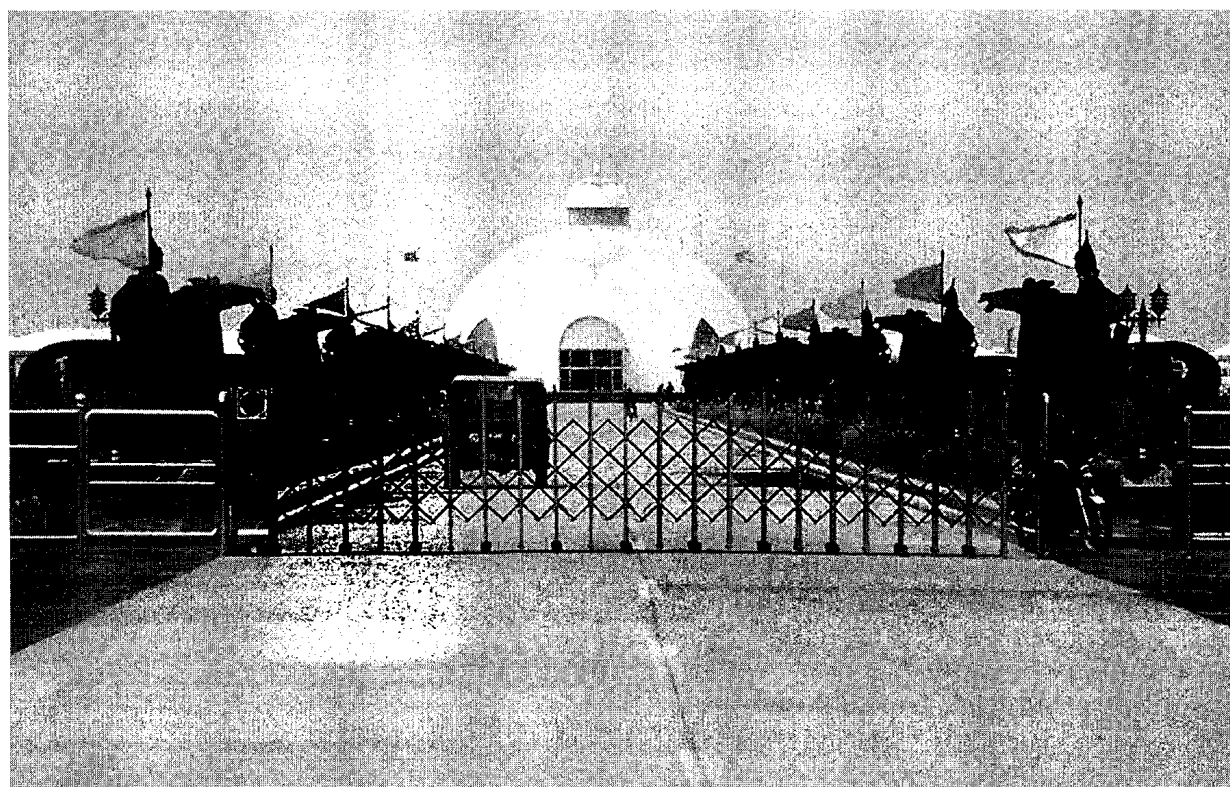


写真4 生態保護区という観光地。
モンゴル風天幕を模倣した固定建築が目立つ。

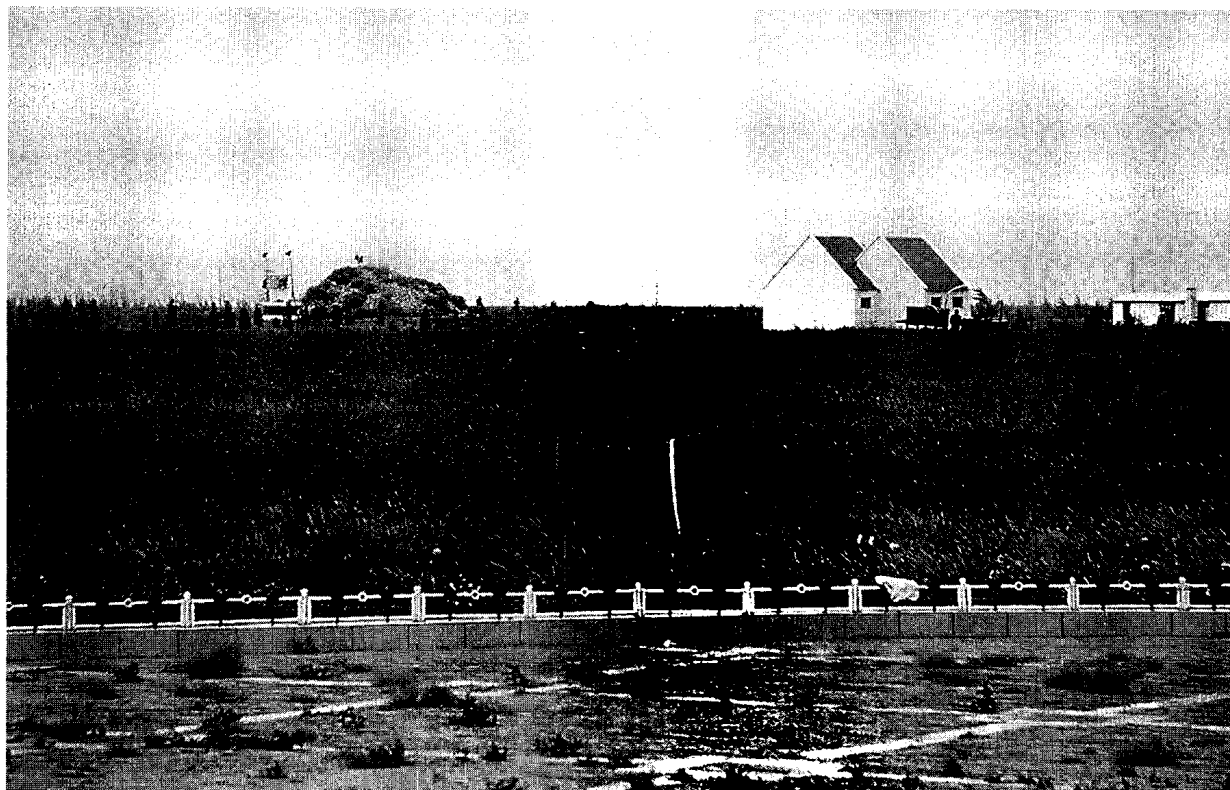


写真5 生態開発区。
家畜が入らないように柵で囲まれているため、草の生長も良い。

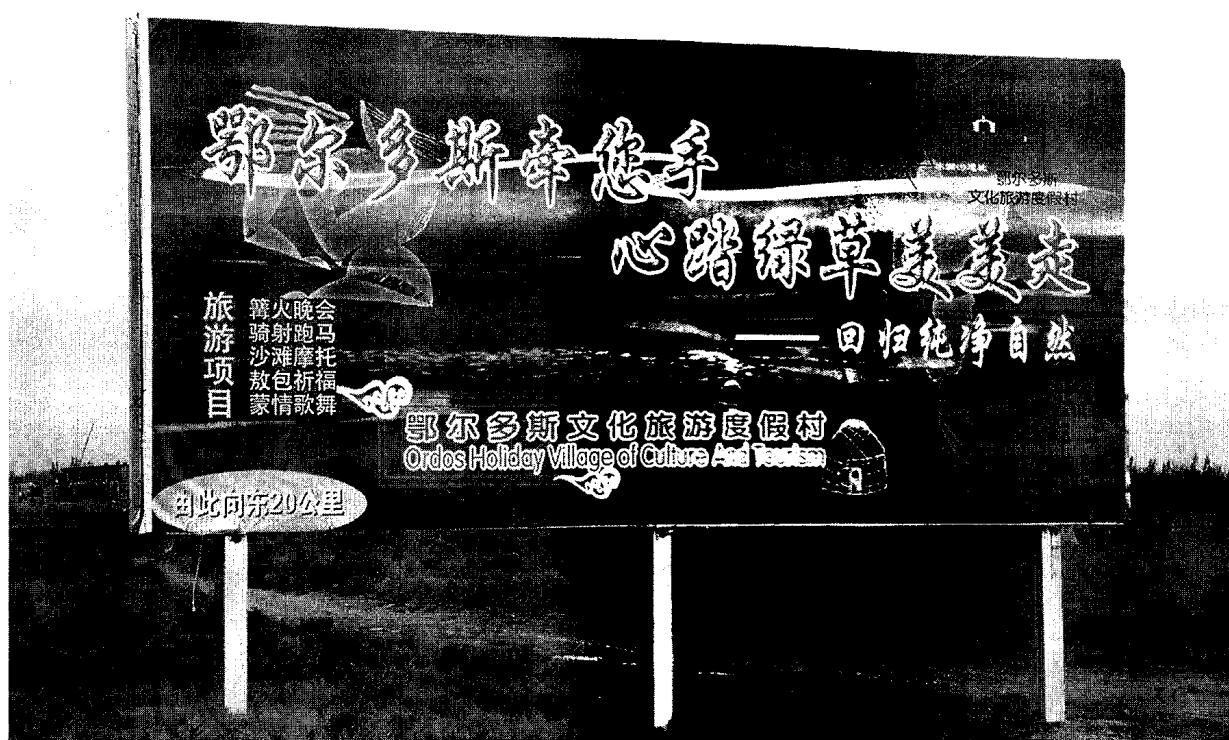


写真6 生態保護区という観光地。
観光客はキャンプ・ファイアや騎馬弓射などに参加する。

とどおりに復元することを「開発」と表現することからも、中国における独自の生態観の一端を垣間見ることができよう。

3：生態移民と冠した強制移住

内モンゴル自治区オルドス市は歴史上「河套」と呼ばれ、漢族の中原王朝と北方の遊牧民が勢力をはって対峙してきた地域のひとつである。漢人側が強くなったときには河套地域に進出して都城を建設し、屯田を行った。このような屯田地域の跡はほとんど例外なく塩田化が進み、その周辺には沙漠が広がっている。これは中国の研究者たちにも認められている（景愛 2000:136-176）。

河套すなわちオルドスは南と北西が長城に囲まれている。長城に沿ってその両側に延々と数百キロにのぼる沙漠の帯がある。早くとも18世紀なかばころから漢人農民に開墾された結果である。このように、漢人農民が活動してきた地域は、すべて環境破壊という結果を招いている。

オルドス市オトク前旗マンハト・ソム（村）がそのような地域のひとつである。「マンハト」とは「沙漠のあるところ」との意味である。沙漠化がすすんだため、生計維持が難しくなり、他の地域への移住が政府主導で行われている。これを生態移民という。このような移住は内モンゴル自治区の各地で行われており、各界の注目を浴びている。たとえば、台湾に拠点をおく蒙蔵委員会編集の『蒙蔵之友』78号は『聯合報』の記事を引用するかたちで、内モンゴル自治区東部エベンキ族の「生態移民」について伝えている（『蒙蔵之友』78 2002:20-21）。また、『朝日新聞』も2002年10月12日付けで「森追われる〈最後の狩人〉—ヤクート族、中国の定住政策で」と題する記事を出している。

沙漠のマンハト・ソム（村）からの移民たちはオトク前旗政府所在地のオルジャチ鎮周辺などの地域にうつされた。移住費は政府が据出する。新しい居住地は整然と区画され、「牧民新村」との名前が与えられている。かつて、長城の北側で形成された入植漢族の村落を「社会主義新農村」と呼ばれていた。「社会主義新農村」が沙漠化し捨てられたあと、「牧民新村」として生まれ変わろうとしている。

政府は牧民新村の住民一戸につき20畝の灌漑農地と乳牛1頭を買いあたえる。こちらは低利子借款で、3～4年かけて返済することになっている。「牧民新村」から生産された牛乳は寧夏回族自治区の首府銀川市などに運ばれる。オルドスは寧夏回族自治区に羊肉、牛乳などを提供する食料基地となりつつある（写真7, 8）。



写真7 寧夏回族自治区のために畜産品を提供するオルドス市の看板。
「清真」とはムスリム専用を意味している。

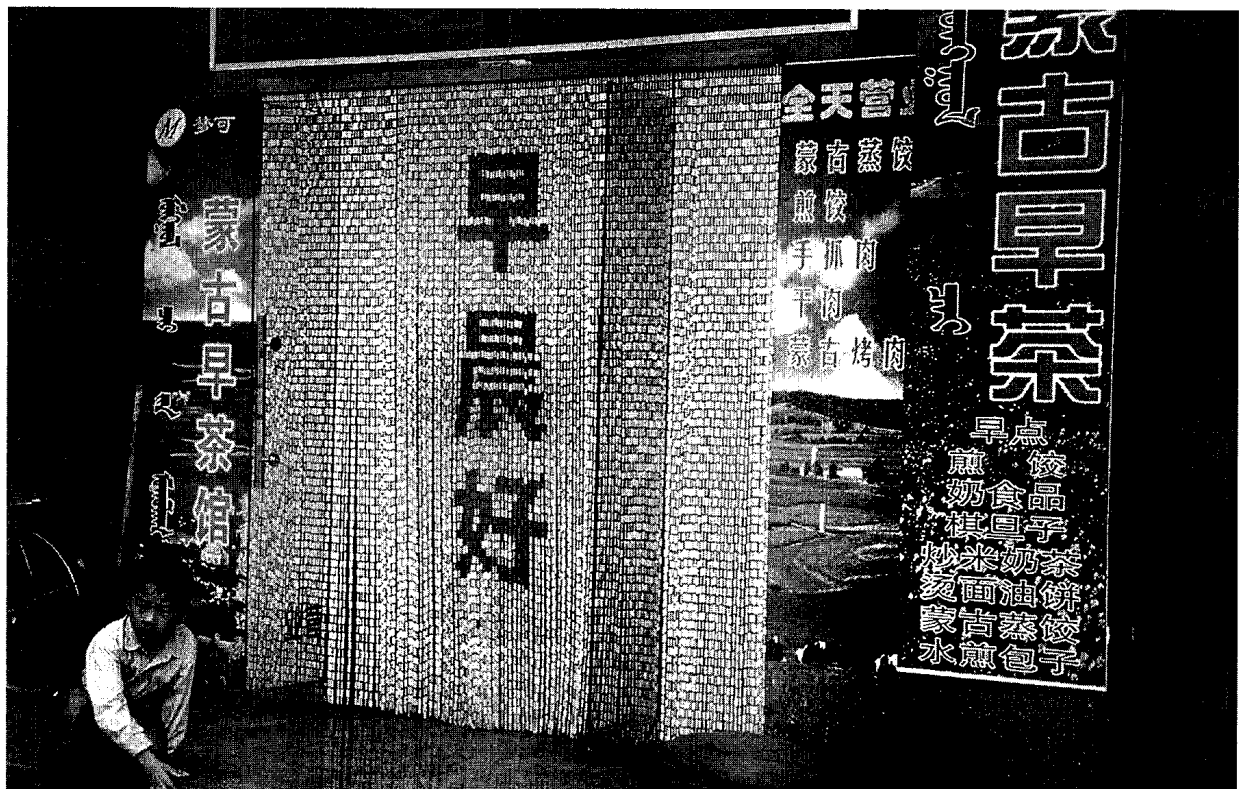


写真8 アラシャン盟バヤンホト市内のモンゴル風レストラン。
肉や乳製品中心の料理は漢族にも喜ばれる。

4：良い年の過ごし方

オルドス市から黄河を西へ渡って、寧夏回族自治区に入った。ここで、オルドス市を訪れて羊毛や羊を買う回族商人に話を聞いたあと、賀蘭山をこえてアラシャン盟に入った。アラシャン盟は、西から東へエジナー旗、アラシャン右旗、アラシャン左旗という3つの旗からなる（調査ルート図参照）。中華民国時代から現在まで、エジナー旗は甘肅省に、アラシャン左右両旗は寧夏省（1950年以降は寧夏回族自治区）に、それぞれ領有されたことがある。最終的にアラシャンは内モンゴル自治区の一盟としての地位を獲得するが、これには複雑な民族関係と民族政策が反映されている。

一昨年（2000）、アラシャンはひどい干ばつにみまわれた。そのため、家畜が群れ全体として妊娠できないくらい牧民たちの生活に重大な影響をもたらしたことが伝えられている（小長谷 2001:83-84）。今年は往年と全く違い、見渡す限りの沙漠性草原は緑に覆われていた。

今年は良い年となったこともあって、アラシャン盟政府所在地のバヤンホトでは、牧民たちの祭典、ナーダム祭が開催されていた（写真9）。バヤンホトとは「豊かな町」との意である。ナータダム祭に欠かせないモンゴル相撲、ラクダの競争などモンゴルの伝統的なスポーツも披露されていた。漢族や回族の商



写真9 アラシャン盟のナーダム祭の会場。

人たちは、ナーダム祭の会場で商売に励んでいた（写真10,11）。定住して町に住むモンゴル人たちも、これを機会に、忘れていた馬の背中に跨って写真に収まっていた（写真12,13,14）。

1940年末から1950年にかけて、この地で西蒙自治運動が展開されていた。そのときの当事者たちで今も健在な人に話を聞いたかったが、ナーダムの宴席から彼らを引きはなすことはできなかった。雨が多く、草の成長も良い年には酒の消費量があがる。良い年の過ごし方だという。



写真10 ナーダム祭でアメ・リンゴを売る漢人女性。



写真11 ナーダム祭に来ていた回族の女性。



写真12 ナードム祭でモンゴル人のために活躍する写真屋。
モンゴル語で「カラー写真」との看板を立てている。

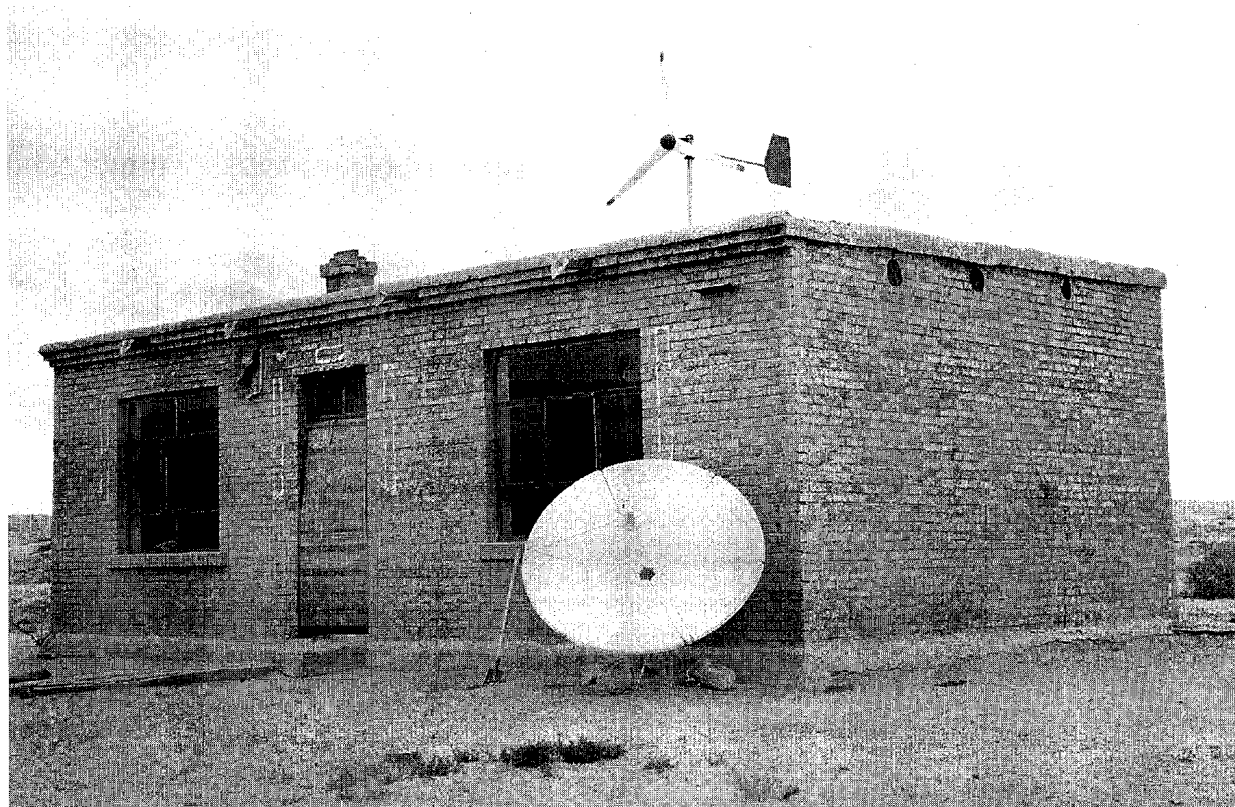


写真13 定住したアラシャン・モンゴル族の家屋。
衛星放送を受信する設備を持つ。



写真14 馬に跨って写真撮影をする定住モンゴル人。

5：小北京の断碑

アラシャン盟政府所在地のバヤンホトはかつて1950以前に「小北京」と呼ばれるほど、内モンゴルの草原地帯にあったもっとも有名な町のひとつであった。

「小北京」にはモンゴル人のほかに、アラシャン王に嫁いだ清朝の公主に追隨してきた満洲人と漢人(写真15)、それに回民も居住し、早くから多民族の住民で賑わっていたことを、陶布新は伝えている(陶布新 1983:139-150)。

バヤンホト滞在中にアラシャン盟立博物館を見学した。現在の博物館はかつてのアラシャン王府(写真16)を利用している。博物館ではバヤンホトの前身である定遠宮(写真17)の造営に関する石碑の拓本を3枚、館長のオユンゲレル(傲雲格日勒)氏から提供してもらった(資料2, 3, 4)。石碑はいずれも博物館に保管されているそうだが、時間的な制約から石碑の寸法を計測したり、もともとどこに立っていたかなど、関連情報を詳しく収集することはできなかった。いずれも断碑ではあるものの、往時の定遠宮のアラシャン・モンゴルの歴史を知るうえで、重要な資料であることにはまちがいない。以下では、主として手元にある調査報告や文史資料類を用いて、碑文に関する簡単な手がかりを提供しておきたい。

『蒙古族社会歴史調査』(1985)によると、定遠宮は雍正八年(1730)に岳鐘琪の上奏を受けて立てられたとしている。雍正九年にアラシャン・モンゴルのリーダーである多羅郡王阿寶が青海地方からアラシャンにもどった時、定遠宮も清朝皇帝から彼に下賜されている。この経緯を記した「定遠宮記」たる石碑は定遠宮城南門の瓮城内に立っていたが、1950年代に旗の財政科の宿舍の井戸に使用された。それには次のような碑文があったという(『蒙古族社会歴史調査』1985:3)。

賀蘭山北,乃朔方之保障,沙漠之咽喉也。聖心軫念山後一帶,切近寧城,特移厄洛特郡王阿寶部落於西青海,渡厄爾多斯七佐領於河東,險要尽歸内地,命仕郎臣通智細行踏看,復命会同督臣岳鐘琪詳議具奏。別命臣通智暨光祿卿臣史在甲督理工務、修濬惠業、昌潤二渠、建設新渠、宝豐兩渠。安插二万余戶、耕鑿遍野。而賀蘭山后葡萄泉等處、水甘土肥、導引諸泉、亦可耕種。兼之、山陰挺生松柏、灘中多產紅塩。且形勢扼瀚海往來之捷路、控蘭塞七十二處之隘口。奉旨特設一營、名曰定遠。爰相地形高下、因山筑城、氣勢軒昂。設武弁、置屯兵、西接平羌、遥通哈密、巴里坤等處。東接威鎮、遠連三受降城、兩狼山之要地。内外連絡、辺疆寧謐。良由聖漠廣運、神武遠施。億

万斯年、咸戴帝徳之高深矣。因紀盛世、而鐫之石。雍正八年歳在庚戌、秋八月之吉。



写真15 収穫を喜ぶアラシヤンの漢人農民。



写真16 アラシャン王府。



写真17 定遠宮城門にかつて飾ってあった石額。

扼瀚海往來之捷路險要控蘭塞七十三處之隘
維郡王阿寶奉

大理寺正卿史在甲築立城池始名曰定遠雅

土羅布歲多雨濟祥徵瑞應物阜民康重

遺者特祭豐富萬物雍熙復于嘉慶二十合商

益効靈濟設禱祥萬姓

石碑也

靈昭萬世

神明年庚子秋肅北之威感不其可
 傳新道齋大理寺正卿在
 欽差蔡汝於頭開會理工務
 靈應堂之石碣其書文曰
 惟持社稷之責城西北書年庚子
 先一夜夢有九人登立一廣內有
 牢二童子二鬼使一即此處土神
 形年甚少無鬚戴一長翅烏紗
 封余言曰吾豈庸人也守此土
 言畢則向東西北三
 兵福庇保護太有賴焉爰如
 庚戌秋七月吉日立
 嘉慶下丑年和碩親王瑪喀巴拉

乾清門行走河拉喜和碩特親王勒特巴

資料3



資料4

私はこの「定遠營記」という石碑がその後どんな運命をたどったかについては、何ら情報を持たない。なお、『阿拉善文史資料』（第三輯）にもこのいわゆる「岳氏碑記」が抄録されているが（『阿拉善文史資料』1988:50-51）、語句に若干の差異も見られる。石碑そのものを見ていないため、どちらが正しいか判断する材料がない。ただし、「岳氏碑記」は定遠營の建設に関するもっとも古い碑文資料である可能性が高いことから、今回収集できた断碑の碑文を理解するうえで、参考になるのはまちがいない。

資料2 碑文は「扼瀚海往来之捷路控蘭塞七十二处之隘……羅郡王阿寶奉……大理寺正卿史在甲築城池始曰定遠雍……王羅布蔵多爾濟……（以下略）」とはじまっている。この多羅郡王阿寶（～1739）という人物はアラシャン・モンゴル

第二代札薩克で、乾隆四年（1739）に死去している。阿寶について三代目札薩克となったのはその次男の羅布蔵多爾濟で、乾隆二十二年（1757）に多羅貝勒から多羅郡王に昇進している。羅布蔵多爾濟はアラシャン・モンゴルのもっとも有名な王で、乾隆四十八年（1783）年に亡くなっている（『蒙古族社会歴史調査』1985:3-4）。

資料2の碑文にある「扼瀚海往來之捷路控蘭塞七十二處之隘」との文言は、上記「岳氏碑記」碑文にも見られる。おそらく先代碑文からの引用であろう。また、「嘉慶二年」（1797）という年号もあることから、それ以降に立てられたものであろう。

次に資料3を見てみよう。この中の「仕郎臣通智」という人物名は上記「岳氏碑記」にも登場するし、「……年庚戌秋七月吉日立」との一句も「岳氏碑記」中の「庚戌、秋八月之吉」を想起させる。また、「嘉慶丁丑年和碩親王瑪哈巴拉……」との表現があり、嘉慶丁丑年は1817年にあたる。和碩親王瑪哈巴拉については、『蒙古族社会歴史調査』ではアラシャン・モンゴルの五代目札薩克とし、嘉慶十年（1805）に札薩克を継承し、道光十二年（1832）にその息子が爵位を受け継いだという（『蒙古族社会歴史調査』1985:3-4）。そのため、瑪哈巴拉の死亡時期も道光十二年以前と推測できよう。

最後の資料4の碑文は、冒頭に「関帝廟記」とある。モンゴルではかつて関帝こと関羽をゲセル・ボグドと呼んで祭る風習があり、定遠營にもそのような祭祀設備があったことを断碑は伝えている。また、碑文から和碩親王瑪哈巴拉の名前も確認できる。碑文の最後に「大清嘉……」との言葉があることから、嘉慶年間のもものと見ても差し支えなかろう。

以上3つの断碑であるが、今後『清実録』やモンゴル語と漢語档案などの資料とあわせて、さまざまな角度から研究されることが期待できよう。

アラシャン・モンゴルの良い年の快適な暮らしをこれ以上邪魔しないよう、私はアラシャン左旗東部のバヤンジラタイ（吉蘭泰）鎮を目指した。バヤンジラタイにすむイスラーム教を信じるモンゴル人たちの実態を調べるための旅である。これらのモンゴル人の歴史と現状については、近いうちに別稿でとりあげる予定である。

今回の調査を通して、歴史とは決して過去のものではなく、さまざまなかたちで現在形で機能し、現在の人々の行動に歴史が集約されていることを、改めて確認することができた。それは、狭い意味での事件や出来事の蓄積としての

歴史ではなく、環境や生態変化など、人間の行為が及ぶすべての対象に当てはまるものだ、と認識している。

謝 辞

今回、調査の機会を与えてくださったのは、総合地球環境学研究所の中尾正義教授である。調査を実施するにあたって、国立民族学博物館の小長谷有紀助教授から有益な助言をいただいた。現地ではオトク前旗蘇勒徳旅遊文化村の王吉雅氏とオトク旗文物管理所所長の巴図吉拉葛拉氏、それに阿拉善博物館のオユンゲレル（傲雲格日勒）館長のお力添えで、有用な資料を集めることができた。記してお礼を申しあげたい。

参考文献

阿拉善盟地方志編纂委員会弁公室

1988『阿拉善盟史志資料選編』第三輯，銀川：寧夏社会科学院印刷廠。

景愛

2000『沙漠考古通論』北京：紫禁城出版社。

橋本和也

1999『観光人類学の戦略』京都：世界思想社。

小長谷有紀

2001「モンゴル牧畜システムにおける水環境の危機」『モンゴル高原における遊牧の変遷に関する歴史民族学的研究』（科研報告書，課題番号10041052）。

内蒙古自治区編輯組

1985『蒙古族社会歴史調査』，呼和浩特：内蒙古人民出版社。

蒙蔵委員会編

2002『蒙蔵之友』78号。

陶布新

1983「内蒙古的“小北京”一定遠營」『内蒙古文史資料』第十輯，呼和浩特：内蒙古人民出版社。

楊 海英

1990「鄂爾多斯無定河流域定住蒙古民族の現状」『豊日史学』54・2/3:23-38。

『朝日新聞』（夕刊）

2002年10月12日。